

2021年 9月 5日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教「そして覚えていること」 マタイによる福音書 15章29節-16章12節 高橋彰

◆大勢の病人をいやす

15 29 イエスはそこを去って、ガリラヤ湖のほとりに行かれた。そして、山に登って座っておられた。30 大勢の群衆が、足の不自由な人、目の見えない人、体の不自由な人、口の利けない人、その他多くの病人を連れて来て、イエスの足もとに横たえたので、イエスはこれらの人々をいやされた。31 群衆は、口の利けない人が話すようになり、体の不自由な人が治り、足の不自由な人が歩き、目の見えない人が見えるようになったのを見て驚き、イスラエルの神を賛美した。

◆四千人に食べ物を与える

32 イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた。「群衆がかわいそうだ。もう三日もわたしと一緒にいるのに、食べ物がない。空腹のままで解散させたくはない。途中で疲れきってしまうかもしれない。」33 弟子たちは言った。「この人里離れた所で、これほど大勢の人に十分食べさせるほどのパンが、どこから手に入るでしょうか。」34 イエスが「パンは幾つあるか」と言われると、弟子たちは、「七つあります。それに、小さい魚が少しばかり」と答えた。35 そこで、イエスは地面に座するように群衆に命じ、36 七つのパンと魚を取り、感謝の祈りを唱えてこれを裂き、弟子たちにお渡しになった。弟子たちは群衆に配った。37 人々は皆、食べて満腹した。残ったパンの屑を集めると、七つの籠いっぱいになった。38 食べた人は、女と子供を別にして、男が四千人であった。39 イエスは群衆を解散させ、舟に乗ってマガダン地方に行かれた。

◆人々はしるしを欲しが

16 1 ファリサイ派とサドカイ派の人々が来て、イエスを試そうとして、天からのしるしを見せてほしいと願った。2 イエスはお答えになった。「あなたたちは、夕方には『夕焼けだから、晴れた』と言い、3 朝には『朝焼けで雲が低いから、今日は嵐だ』と言う。このように空模様を見分けることは知っているのに、時代のしるしは見る事ができないのか。4 よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しが

◆ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種

5 弟子たちは向こう岸に行ったが、パンを持って来るのを忘れていた。6 イエスは彼らに、「ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種によく注意しなさい」と言われた。7 弟子たちは、「これは、パンを持って来なかったからだ」と論じ合っていた。8 イエスはそれに気づいて言われた。「信仰の薄い者たちよ、なぜ、パンを持っていないことで論じ合っているのか。9 まだ、分からないのか。覚えていないのか。パン五つを五千人に分けたとき、残りを幾籠に集めたか。10 また、パン七つを四千人に分けたときは、残りを幾籠に集めたか。11 パンについて言ったのではないことが、どうして分からないのか。ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種に注意しなさい。」12 そのときようやく、弟子たちは、イエスが注意を促されたのは、パン種のことではなく、ファリサイ派とサドカイ派の人々の教えのことだと悟った。

聖書 新共同訳(C) 日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987,1988

イエスはガリラヤ湖のほとり、人里離れた山に登って座られました(5:1, 24:3)。そこにやって来たのは体の不自由な人びと、病の人びとでした。原語ではイエスの足元に投げ出されるように置かれたとあります。イエスは一人ひとりをいやされました。山の上の羊の群れという譬え(18:12)はこのような人びとだったのかもしれませんが。さらに人びとは困窮しています。イエスは空腹をも満たされます。弟子たちはイエスが前になされたパンの奇跡(14:18-)を忘れてしまっているかのようです。しかしイエスは自ら口火を切って再度パンと魚を多くの人びとに分けられました。繰り返される給食は同じ「取り」「感謝して祈り」「裂き」「渡す」という流れで記されます。弟子たちや人びとは前の奇跡とそれをなされるイエスを思い出したでしょうか。教会はイエスのパン裂きを繰り返し行い続けます。そうしてイエスの憐れみと、イエスが成し遂げられた救いを「想い起こす」ことを大切にしています。山上で神のみ意を教えられることから始まった(5:1-)イエスのガリラヤでの宣教は、いやしと給食という仕方で神の憐れみ深さを示される(32節、18:27)場面で結ばれます。イエスの宣教を通して神は人々と共におられ、語りかけ働きかけられて、生きておられることを示されたのでした。イエスは群衆を解散させられます。自身の栄光や力を誇示し、人を集めて勢力を増すようなことはなされませんでした。

厳しく律法を守り清さを守る「分離」の生活を主張するファリサイ派と、上流階級で権限を持つ現世主義のサドカイ派は本来全く対立した立場です。それがイエスへの敵対で一致団結して、イエスを試そうとし、「天からのしるし」を見せよと迫ります。それはイエスに、神から遣わされた者だという自己証明をする要求でした。ファリサイ派は先に律法学者たちと来て同じ要求をしたことが記されていました(12:38)。ヨナのしるしは、ヨナがニネベの町での宣教が人びとを悔い改めに導き救いになった出来事とイエスの神の国を告げる宣教が重ね合わされ、またヨナの魚の腹の中での三日三晩をイエスの十字架と復活の出来事を暗示するものと考えられますが、ここでは深く触れられず、イエスは立ち去ります。決定的に断絶した場面です。イエスの「しるし」を言うならば、自身の権威を証明するための行為や奇跡によるのではなく、イエスの神の国を告げる教えと癒しと共食という、人びとの具体的な生への神の憐れみです。そしてその行き着く先の十字架、復活です。

しるしを求める人びとは、悪意や嫉妬、軽蔑などが小さなパン種が全体に広がるように不信が広がり、しるしを要求して神を試そうとします。弟子たちはまだパンの心配をします。神が備えてくださることを忘れ、信頼することができずにいます。